

言語が創造するもの

—小学生の比喩表現をめぐって—

古岩井 嘉蓉子

I. 初めに

比喩表現の営みとは、コードを組み替えて新しい意味を読み取ることです。別の言い方をすれば人間が既に所有している知識の枠組を本来のものとは別のもののために転用することと云えます。既知を未知なる物事や新しい経験を述べるのに用いることで、このようなことができるのは、人間が物事を認知し想像することができるからです。従来の既存のコードを組み替え別の新しい意味を創り出すことで、人間らしい営みができるのです。こう考えると、たとえ子供といえども未知なる経験そして不十分な語彙と表現力を補う目的で本来の語句の組み替えをしているのです。

次にこの比喩についての考え方を参考に挙げて、(II)で本論に入りたいと考えます。

一つは、'The concept is metaphorically structured, the activity is metaphorically structured and consequently the language is metaphorically structured.'

(Lakoff and Johnson 1980:5)

という考えで、それまでの言語研究の流れを変えたといわれる *Metaphors We Live By* (1980:5) の一節を挙げたものです。もう一つは古い時代の定義で、アリストテレスが *Poetics* で次のように記述しているものです。

'But the greatest thing by far is to have a command of metaphor. This alone cannot be imparted by another; it is the mark of genius, for to make good metaphors implies an eye for resemblances.'

(*Poetics* with an introductory essay by F. Fergusson:XXII:104)

以上、比喩について二つの定義を挙げましたが、LakoffとJohnsonが提唱しようとしているのは、複雑な概念、例えば時制、様相等は、存在物ではなくて概念的に複雑な関係を示すものであって、これらをより単純化された概念、又は現象に移し替えて表現するのは、結果としては、根本的には

一種の比喩行為をしたことになるということです。ある事柄を理解するのに別の事柄における経験を通して理解しようと試みる認知作用であるといえます。一方、アリストテレスの *Poetics* に書かれている定義は、修辞学の出発点となった直感的な連想作用のことです。しかし両定義とも実際は、言語そのものがより多くの表現力を含蓄するようになるための動因を洞察していることに変わりはありません。

ところで、もう少し比喩表現自体について触れると、語や句の意味領域を広げ、従来の語句に新鮮な使い方を許してくれるような私達の能力は、人間の言語の本質的な特徴です。私達は、変化する環境の下で常に新しい事柄について話さなければならない状況に追いこまれます。そして、その時に、しばしば私達は限られた語句しか持ち合せていないのです。ですから、もし私達が語や句の意味領域を拡大することができないとしたら、今までに一度も出会ったり、経験したこともないような事柄について話すのは、大層難しいことになるでしょう。幸いにも私達は、時には考えているよりも遥かに語句の意味領域を拡げて用いているのです。そしてそれを比喩表現と呼んでいる訳です。この場合には、その意味は意味領域のプロトタイプから遠く離れて逸脱しているといえます。

〈human head〉 〈head of a pin〉 〈head start〉 〈head master〉 〈head line〉 〈catch a ball〉 〈catch a word〉 〈catch a cold〉 (Burling:32) を例にとると、それぞれの *head* や *catch* の意味と用法は異なっていますが、*head* と *catch* の二種類の語には、それぞれ何か共通する意味的特徴を備えているのを、私達は感知するのです。プロトタイプからどの位その距離が離れているかによって、その語の用法の新鮮さは異なる訳です。次に、例えば 〈argument〉 (‘議論’) について述べる場合、実戦の場の行為に関する語彙を用いていることに気がつくはずで、相手と論争を戦わすのに 〈We *attack* an opponent's position〉 〈we *defend* our own〉 〈we *barrage* people with questions and try to *shoot down* their arguments〉 (Burling:33) に見られるように、攻撃する、防御する、弾幕砲火を浴びせる、撃ち落とすとなります。そして又、〈Time is money〉 という語句は格言めいておりますが、実生活の中では、時間 (time) を貨幣 (money) に係わる語句をもって表現するのは日常あたり前になっています。〈we can *waste* or *save* time〉 〈we *lose* time〉 〈we *invest* time〉 といった英文の表現は、日本語でもほぼ同じ表現を使っています。このよ

うな比喩表現は日常化したものであり、しかも私達文明社会で生活している人々にとって、文化の一部となっているといえます。元来は比喩表現から移行してきたと考えられるそれら表現語句は、異なる文化圏でも同じように用いられ、特に空間を表わす語句 (in, at, on 等) は、時間の概念を表現するのにも用いられ、これはかなり一般性があります。

一方、詩的な比喩表現について考えてみると、作家特に詩人と呼ばれる人は、大なり小なり意識的に心を打つような比喩表現を創造しなければなりません。私達は文学作品に見られる比喩を深遠で難解な文学の特殊性と考えがちですが、やはり秀れた作品の傑出した比喩表現に出会うと誰でも読書の喜びを感じるの否めません。異なる二つの語句の予測もしなかったような関係を指摘されると、私達の想像力は一層掻き立てられるからです。だからといって、文学作品に見られる比喩は、必ずしも意識過剰な創作と考えるべきではなく、人間誰れしもの言葉の運用能力の中に染みこんでいるものです。あくまでも、話し手や書き手が新しい考えを吐露するために、語に与えられている従来の意味を拓ける創造的方法と比喩を捉えることができます。

過去長い期間にわたって、言語研究の分野では、比喩の研究は大きい関心を集めてきています。成人が比喩表現を使う時には、日常の枠を越えた経験を表現するために、慣用語法の枠を破った新しい表現を求めます。その表現が詩的であるのかどうかは別として、この新しい形の表現は新たな感覚をよび覚まし、その感覚は新しい経験を生み出してくれます。比喩の本質は新しい意味作用の創造です。従来の修辞学があつかう固定化した語と意味との結びつきを打破し、その語 (言葉) の新しい意味作用を可能にし、意味領域を拓け新しい価値を付加してくれるものです。

そこでこの小論では、文学的な比喩あるいは比喩構造と文化といった問題提起ではなく、子供 (小学校1年生～6年生) の書いた自由詩や作文の中に用いられている比喩表現を採りあげることになります。比喩の研究の上で興味深い問題は、どういう切っ掛けで比喩が生じるのかということですが、卓れた言語学者国広哲弥教授の研究から、〈子供が比喩能力を持つようになる〉という発生起源のことで有益な示唆を受けました。子供の言語習得の研究課題から考えますと、チョムスキーの主張する言語の生得性を確認するのに子供の言語行動を観察するのは興味深いことですが、筆者の現在の能力と詩学的アプローチへの興味を鑑みると、教授の比喩研究に対

するアプローチと視点の異なるところもあるので、Ⅱ以下に述べるように資料を整理するにとどめましたが、適切な御助言には感謝の意を表します。

Ⅱ 子供の比喩表現の観察

では、子供（小学校1年生～6年生）の比喩表現はどうなっているのでしょうか。この研究の目的は、次の事柄を確認することです。子供の比喩表現は、修飾表現つまり修辞学上の工夫あるいは拡張表現というよりも、第一次的な言語運用そのものであるという観点からI. A. Richards (*The Philosophy of Rhetoric*, 1936:96) が〈vehicle〉と記述した〈比喩の主語や主意を喩える言葉〉には、どのような言葉が用いられ、そしてそれらに係わる事物や概念の関係はどうかなのかを整理して、子供の描くイメージを観察してみます。

ここで用いた資料は、朝日新聞湘南版の「小さな目」に発表された自由詩、すでに文集になっている『神奈川の小さな目』『ぼくらの詩集小さな目』全3巻、及び日本児童詩研究会、日本作文の会の編集による約17冊の詩集や作文集から、各年齢ごとに140例を集めて選び出し、分析の対象としました。

子供といえども、成人と同様に彼等の言語の文脈の範囲の中で周りの世界と接するのです。私達成人でも同じで、誰でも身近に起る現象を観察することによって、それぞれを主体的に意味づけすることができます。その結果、私達の経験の世界は、各人の持つ言語によって大きく左右されるといってもよいでしょう。子供の言語では特に、彼等の経験は本能的感覚に沿ったもので、子供自身のことばとして処理することができます。

さて、比喩の基本となる〈主語・主意を喩える言葉〉(‘vehile’)と〈喩えられる主語・主意〉(‘tenor’)の語彙を抽出して、これら異なる2つの間にみられる移行を探るため、『比喩表現の理論と分類』(国立国語研究所編, 1977:52)におけるカテゴリーの転換を参考にして、11種類の移行のカテゴリーを作成してみました。

- ① 準擬人化………無生物を、人間を含めた動物の動作、行為、状態に喩える。

- e.g. ビルが生きているみたいだ
- ② 擬人化………人間だけが行う動作・行為・精神活動に喩える。
e.g. あっちのむぎはおじぎして
- こっちのむぎはおどっている
- ③ —A 物を身体の一部に喩える。
e.g. 僕の手みたいなさくの花
- ③ —B 身体の一部をそれ以外の物に喩える。
e.g. 口をはさみみたいに動かした
- ④ 動植物、人間、天体を無生物に喩える。
e.g. 月は鏡のように輝いている
かえるは地面で石のようにじっとしている
- ⑤ 動植物に喩える。
e.g. おかあさんのかみの毛はにんじんみたいに赤いんです
- ⑥ —A 固体を液体に喩える。
e.g. ストローがシャワーのように降ってくる
- ⑥ —B 固体を気体に喩える。
e.g. 黒いほこりがきりのようにたつ
- ⑥ —C 液体を固体に喩える。
e.g. 赤いアルコールはエレベーターじゃないかな
- ⑥ —D 液体を気体に喩える。
e.g. きりのような雨がぬくい空からおちてくる
- ⑦ 感覚の転換（共感覚）ある感覚を別の感覚表現に転換すること。
e.g. 虫の声はリリヤンの色のよう
- ⑧ 無生物の同種類内で喩える。
e.g. お人形さんの家のような鳥かご
- ⑨ 抽象化（現象、出来事も含む）
e.g. 雪はおにみてえだ
- ⑩ 場所を示す語に喩える。
e.g. 花の中は小さな小さなおしろ
- ⑩ 無生物や生物を太陽、星、空に喩える。
e.g. 花火は星をあつめたように

ここでもう一度、比喩の修辭学的な定義を中村明の『比喩表現辞典』(1979:角川書店)から引用すると、「比喩とは直接にさし示す言語形式を使わないで事物、事象に対応する言語形式を提示し、その言語的環境との違和感や文脈上の意外性などで聞き手の想像力を刺激して両者の共通点を推測させることによって、間接的に伝える表現技法である。」表現対象を観察し、その特徴を「直接にさし示す言語形式」でなく、「間接的に伝える表現技法」をもって想像力をかりたて、「両者の共通点を推測させる」方法とするだけで、新しいイメージを創りだしていく想像力という視点がこの定義には欠けています。書き手、話し手は各人の発想と感覚で新しい表現を創る訳で、その結果、その比喩は年齢、環境、能力によって想像力のレベル差が生ずるのは当然です。だから次の小学生の比喩は、上述した『比喩表現辞典』の定義とはだいぶ異っていることが、検討の結果よくわかります。そこでまず第一に、次に挙げる表—1の分類順に沿ってとりあげていきます。

表—1 (各学年140例の比喩表現中)

	分類項目	1年	2年	3年	4年	5年	6年
		%	%	%	%	%	%
1	準擬人化	7.14	27.13	12.14	21.42	20.7	21.42
2	擬人化	22.13	15.70	30.70	25.0	26.41	11.42
3	物と身体との関係	6.42	5.71	3.57	5.71	5.0	9.28
4	無生物化	25.70	15.0	15.0	8.57	12.85	13.56
5	動植物化	6.43	8.56	12.13	9.28	12.14	9.28
6	体の転換	10.0	9.28	5.71	4.28	4.28	8.57
7	感覚による比喩	4.28	0.71	0.71	1.42	1.43	1.43
8	同種類の物の中 で他の物に喩える	7.14	10.0	12.85	10.0	3.57	8.57
9	抽象化	5.0	3.57	4.28	8.57	9.28	12.85
10	場所化	3.57	3.57	2.86	4.28	2.14	2.14
11	天体に喩える	1.42	0.71	2.14	2.86	0.71	0.71

準擬人化と擬人化について：この二つの項目が全体の中で占める割合は、それぞれの学年では $\frac{1}{3}$ あるいはそれ以上を占めています。未開の社会に身を置く人々や原始人そして経験の浅い子供達は、動く物はすべて命あるいは心を所有していると考える傾向が強いので、いわゆるアニミズムによ

る表現が目立つのは当然です。これは物を感情的欲望的に捉え、それらが人間と同じように心を持ち表情を示すと感ずる知覚であり、例えば〈怒る〉〈寂しい〉〈にこにこする〉〈笑う〉〈泣く〉〈嬉しい〉という言葉が比較的多く使用されています。

例A

1. おふろとけんか (小学1年生)

おふろの中で
おふろとけんかした
おふろがおこって
わたしのかおにおゆをひっかけた

2. かぜ (小学2年生)

かぜはどこまでとんで行くんだろう
ピューピューと音をたててとんで行く
たのしそうにおしゃべりしながら
とおいところへどこまでも
どこまでもとんで行く

3. ボール (小学3年生)

うんどうじょうで
赤いボールが一つ
おちていた
ボールがニコニコわらってた

4. 雨のおどり (小学3年生)

雨がかさの上でおどる
とつてもたのしそう
わたしのかさがぶたいたよ
音楽の曲なーに
車にのつても車の上でおどる

5年生や、6年生になると、鎮静的な状態や現象を表現するためにも擬人化・準擬人化を使う表現が目立ってきます。

例B

1. 雨の中のけしき (小学5年生)

サーフィンしている人たちを
 てんぷくさせて喜こんでいる海
若葉をのみこんでしまったきりの山
雨の中でじっとしている景色たちは
何の歌を歌っているんだろう

2. 海 (小学6年生)

今日、海をみにいった
この前はちゃぷんちゃぷん
おどっていたのに
今日はさみしそうに
本を読んでいる

3. かたほうの雨だれは考えている
4. 家はおおやけどになって 死んでしまった
5. 月がぼくの日記をのぞいて

擬人化表現のために、しばしば学校生活を連想させる表現の言葉が多く使用されています。

例C

1. (クロッカスの花) みんなでいっしょに話し合い
2. 赤(花) が一れつにならんで朝礼している
3. ランドセルがスキップしているみたい
4. ジェット機は白いチョークで勉強している
5. ぼくがおに、かん字がかくれる

学校生活に関する単語を擬人化したり、又学校生活における活動や行動を示す動詞、名詞等を使って別の事物や事象を表わそうとしています。文化と言語が密接に関係があるのと同様に、子供の表現についても同じことがいえるのです。

擬人化は、しばしば会話体を用いて表現されます。生命のないものや人間以外の生き物に会話体の表現をさせているのです。

例D

1. 黒板は「くすぐったいよう」っていつているかな
2. まくらが「ねむれ、ねむたくなれ」といつているのかな
3. 「ねようか」と上まぶたがいつ
4. 雨だれおは「おちたくない」といつている
5. すずめが……………「助けてくれ」ってさけんでいつ

子供の身の回りのあらゆる物が心を持ち、自分と同じ感じ方や考え方を所有しているような錯覚を読者に与えるような、直接的表現をもって子供は表現しています。

次に親族関係、人間関係の語彙で大きさ、型を表わしています。

例E

1. あかちゃんきゅうりが3本、おにいさんきゅうりが4本
2. 雲のおかあさん、雲の子供
3. きん魚の親分
4. 中ぐらいの（みかん）はお母さん

擬人化の中で特徴あるのは、呼びかけ表現を低学年の子供がしばしば用いていることです。物や動物を擬人化するのに子供が他人を呼びかけるような云い方をする傾向は、低学年に強いようです。

例F

- ・すずめちゃん ・きりんさん ・めじろ君
- ・夕やけさん ・プレハブ校舎君 ・指くん
- ・お日さま

子供は、無生物には生命が存在していないことを充分承知してはいても、命を生きながらえることこそこの世に存在することに他ならないと考えているのかもしれませんが。

子供は生れながらにして大人の言葉を真似るのが上手ですから、当然大人の慣用句的表現を容易に身につけます。S. ピンカー (Pinker 1994:264) によると赤ん坊は母語についてのある程度の知識を持って生まれてくると考えられると述べています。赤ん坊はすでに胎内で母語の韻律をある程度学習しているとすれば、とりわけ回りの大人の言葉が大きく影響しているのは当然です。しかし日常の言葉は多くの比喩的表現と科学的用語がうまく混成しているし、しかも子供は時には、言語を習得する段階で、一般に何となく類似しているという感覚的直観に依存する度合いが強いといえます。上述したS.ピンカーの著書の中で赤ん坊はおそらく一歳前にすでに生物と無生物の区別をしていると述べています。

次に、「人体比喩」と呼ばれる物と人間の身体の名称との関係は2種類に区別できます。1つは、(1)物を身体の一部に喩えた場合、もう1つは、(2)逆に人間の身体の一部を物に喩えた場合が考えられます。

まず(1)については、花が咲き実がなる様子、外形、色彩、機能、状態を表わすのに身体の部分を示す語を使っています。

例G

- (a) 外観による型・形の類似性によるもの
1. 僕の手みたいなきくの花
 2. おもちゃはとうちゃんの鼻みたい
 3. (掃除機のホース) 長い首をふりまわす
 4. 日本の山は両手をひろげて
- (b) 色彩の類似性
1. (トマト) 赤い顔をしていたんだな
 2. (すいかの種) 黒い目玉がいっせいにわたしをにらんだ
- (c) 類似した機能をもつ
1. 連結機は人間の手だ
 2. 自動車は僕のもう一つの足だ
 3. めろんのおへそだよ (帯のこと)
- (d) 姿、外観が類似している
1. しわだらけのたくわんそれは年とったおばあさんの手のようだ
 2. (ビニールの袋) 大きな顔をぱんぱんにふくらませて

更に(2)については、人間の身体の機能（すなわち手、足、頭、顔、口、血管、毛穴、髪、乳等のもつ外観、状態、機能、動き、感覚）を説明するために物に喩えています。〈喩えることば〉は、食物（チョコレートのパン、ケーキ、マシュマロ、ゆで玉子、おもち、ちくわの皮、中華そば）、日用品（糸、スポンジ、マットレス、はさみ、コップ、ストーブ、電気器具、クッション、毛布、台所器具）、おもちゃ類（ゴムまり、ドッジボール、グローブ、フーセン）等の語彙が用いられています。

例H

1. 糸のような手がのびた
2. お母さんの乳は………ちょこれいとパンのようだ
3. ママの手はマシュマロみたい
4. 弟の手はおもちのようにやわらかく
5. お父さんのひげは針みたいにとげとげして
6. 木の根のように手のこうにしがみつている血管
7. (お父さんの手) まるで毛布のようだ
8. フーセンみたいな頭
9. 母の腰は石のようにかたい

次に一年生の子供たちは、人間、動物、植物、場所、現象を手近にある類似した無生物の属性に喩える、無生物化の傾向が極めて強く、他の年齢の約2倍近い値を示しています。次に示す例は、比較的独創的で新鮮さを感じさせてくれます。

例I

1. おはじきみたいなきくの花
2. ほうせきみたいな木の実
3. 野あざみは………はりみたいに
4. かぶと虫………きかん車みたいだよ

これとは反対に、次に示すように小学1年生では、動物や植物等の生物に喩える表現が少なく、高学年になるにつれて動植物に喩える動植物化の表現の使用数が増えています。それは、動植物についての知識を得ると同

時に、子供たちは、旧いありふれた語彙をやめて、新しく修得した語彙にまでその使用域を拡大するからでしょう。

例 J

1. 空に忘れた鏡が1まい
だれがのぞいておけしようするの
空に忘れたバナナが一本
だれがとってたべるんだろう
2. 光線にあたって、のみのようなほこりが飛びはねている
3. 小さなかわいいブルーベリー
目立たなくて
ぱっと見た時はざっ草みたい
青い海を渡るツバメの目のよう

上に述べた比喩は、子供の日常生活にとって身近かな無生物と生物の間に見られる共通性を子供たちが、認知することから始まります。生物と無生物の間の共通性は外見特に色・形・感触等に基づいた判断に委ねられていて、生物か無生物かの分別ではないようです。人間は生後一年以内に生物無生物の判別能力を身に付け、其々の生物が持つ本質が異っていることも子供が幼稚園にいく頃には理解しているのです。(Pinker 1944:424-426)しかし小学生の書いた比喩表現では、彼等の習得した動植物の種類とその隠れた生態系上の特徴をある程度知識として頭の中にはあっても、言葉の表現上の手段となると身の廻りの物の外見だけの根拠で喩えているといえます。

次の例 K は 液体、固体そして気体の相互間での喩えによる転換です。

例 K

1. 大なみのようにブルトージーが近づいた
(固体→液体)
2. 黒いほこりがきりのようにたつ
(固体→気体)
3. 赤いアルコールはエレベーターじゃないか
(液体→固体)

4. 白波がきりのようになって
(液体→気体)
5. 空の雲………メロンパンのように見えました
(気体→固体)

すでに既定された表現の使用よりも、むしろ感覚をよびさますことによって何か新しい経験を描き出しているようにみえます。特に感覚による喩えは、小学1年生で目立っているようです。これは、年令の低い程、聴覚、視覚、嗅覚、味覚、触覚が敏感で、音、色、香り、嗅い、暖かさ、冷たさ等にすばやく反応を示すことを物語っています。同種類の感覚の中での移行の他に、実際に刺激を受けている感覚を別の感覚をもって喩える表現もこの中に含まれます。安井稔氏は、〈warm colour〉という例を挙げてそのことを説明しています。(「共感覚とメタファー」；『英語青年』6月号, 1976) 実際に刺激を受けている感覚がある場合、それとは別の感覚のかたちが存在する時、この共存している感覚を共感覚とよびます。先に挙げた例では〈warm〉をさすことになる訳で、この共感覚的表現の法則性は、転移の方向性が低感覚からより高級の感覚へという一般的な傾向を示すといわれています。感覚に抽象度の階層性を認め、その方向は低い感覚である触覚から味覚→嗅覚→視覚→聴覚という順序になるということです。他に転移表現 (transferred expression) (国広 1982:192) として通常の表現とは違って修飾語の位置が修飾すべき語から離れたところに存在しているような修飾表現があります。参考にいくつかの例を『意味論の方法』(国広 1981) より挙げてみましょう。〈小首をかしげる〉 〈小足に歩く〉 〈shed silent tears〉 〈after his solitary meal〉 これらの例は共感覚表現ではありませんが、人間はいかに感覚的に認知し表現を創り出しているのかがわかります。子供の共感覚表現の例のいくつかをみると、

例L

1. 虫の声は(聴覚) かとり線香のうず(視覚) みたい
2. 虫の声は(聴覚) リリヤンの色のよう (視覚)
3. 虫の声は(聴覚) 小さなまるがいりまじったもようみたい (視覚)
4. お月さまが金色に(視覚) つめたい (触覚)

虫の声(聴覚)をかとり線香のうず、リリヤンの色、小さなまるがいりまじったもようという視覚に喩えています。例文L4は共感覚の一般法則、すなわち低い感覚からより高い感覚に属するものを修飾する傾向に反していますが、〈つめたい(触覚)金色(視覚)〉という表現に極めて意味の上では類似していると考えられます。子供のひとひねりした表現で面白いといえます。一つの音を他の音に喩えるような聴覚に関する比喩、そして視覚行為を触覚に係わる語彙で喩える表現等、共感覚に関連する比喩がみられます。子供がある音を聞く(聴く)と、それに伴って視覚に訴える色が眼前に見えるような気分になって音と同時に色まで“聴こえる”ような体験をそのまま表わしているといえます。ここで例に挙げた音、色そして形の関連性は、新鮮で鋭敏な感覚を持った子供には当然なことといえます。この一連の現象は子供や大人にとっては自然に起る共感覚で、この中でも色(視覚)と音(聴覚)に関する共感覚は代表的といえそうです。共感覚に鋭い反応をする人は、しばしばある音を聞くとある種の色を普通の人より強く感じる事、そして言葉や音を聞くだけで脳内の中でも特に色に係わる視覚領域が反応を示すことについてR.L.Traskは述べています。このような共感覚に対して鋭い人は子供の早期の頃あるいは出生の時にすでにこのような能力を持っているのですが、共感覚がどのようにして起るのかはまだ解決されていません。すべての子供は共感覚を持って生れてくるが極少数を除いて年齢と共にその能力は消滅していくと主張する研究者もいるようです。(Trask 1995:137)

一方、日本人が通常〈匂うが如く咲く桜〉という表現を用いますが、これは、実際には嗅覚に訴えるのではなくて視覚〈色彩感覚〉に訴えかけて、桜の花の咲く有り様を述べていると解釈します。しかし、これは子供の共感覚の色聴等とは区別して考えるべきでしょう。〈匂うが如く咲く桜〉(梅一りんの香り)という表現の中には、日本人の長い営みの文化の中で育まれてきた感性により創られた表現とみるからです。ですから共感覚の相互作用とはいえないでしょう。因みに語源的に〈匂う:ニホウ〉は次の様に説明できます。ニ(丹)は赤い土の意で転じて赤色、ホ(穂・秀)は外に現れることで、〈ニホウ〉は赤などのあざやかな色が美しく映えることを意味します。(新村出編:広辞苑第4版及び国広先生の示唆)

同レベルの感覚の間での比喩、特に聴覚については次のようなものがあります。

例M

1. ビルの音は心臓の音のようだ
2. おるがんのいっとう右がわをたたいたら キイキイなった
じどうしゃのきゅうブレーキのおとににてるな
おるがんのいっとう左たたいたら ブウブウなった
ぶたがなっているみたいだなあ

次に、ある物を同じカテゴリーの別の物に喩える場合には、ある物の説明が難しく、また、形や状態、色彩等の説明が不可能な時には、類似性のある他の物を借りて表現するのは一般的な傾向のようです。言葉を習得する段階にある子供にとっては、比喩とは、それを使わなければ表現できない新しい世界の創造であり、必ずしも大げさ誇張とか、あるいは装飾のためのものではありません。特に、次に示す例のように同じカテゴリー内での喩えは、子供の拡大していくイメージの世界を支えているようです。

例N

1. サフランの花は、チューリップににている
2. マイクロバスみたいなキャラバン
3. おわんみたいなすげ笠かぶり
4. ヤマバトのような鳥
5. 小雨のように降る涙
6. お人形さんの家のような鳥かご
7. お風呂のタオルはケープのようにみえる

子供は時々、〈主意を喩える言葉〉(vehicle)と〈喩えられる主意〉(tenor)の間の一つ以上の類似点を見つけ出して比喩表現をしているようです。例えばヤマバトのような鳥という表現では、ヤマバトの大きさ、かたち、羽毛の色のいずれかの点で類似している訳で、どの類似点子供にとって最も大切なものなのかは、個々の子供によって違うのではないかと考えます。しかし、子供が何かを表現したいが、適切な語や語句の運用力の不十分なために、それを補おうとする表現が、子供の比喩表現の始まりといえるのです。

次に、抽象化と仮によぶ比喩表現が見られます。これは、行為、行動、

状態、景色そして表情等を、抽象的な概念や、出来事（想像上のもの）、そしてある特定の現象を借用しながら喩えることです。この比喻表現は、学年が上るに従って増加しているようです。例えば、1年生の子供が抽象的な比喻表現を使用する頻度数は、6年生の子供のその約半分位です。

例O

1. 雲はおにみてえだ
2. 柿とりはさるかに合戦みたいやな
3. (霜柱) 小さな妖精たち
4. このしわ1本1本が苦しみの物語のようだ
5. 洪水のようにあふれる涙
6. 算数国語社会理科のテストテストで交通ラッシュ
7. ポパイのように強い兄さん

次に建物や場所に喩える場合、年齢による差はあまりみられません。

例P

1. びーだまは海みたいだよ 光があたると
2. はこ庭のおいけのようにかわぐち湖
3. わたしのかさが舞台だよ
4. デパートのようなぼくのカバンだ
5. おれのはらはアマゾンの底なし沼みたいだ
6. まるで海みたいに光る雲
7. 海の底はすてきな森の中

太陽、星、月等の天体に関する語彙に喩える表現は、子供の詩には多くみられません。しかも、〈喩えられる物〉は限られた範囲のもので。これは、天体に関する語彙には、〈喩えることば〉として、イメージの創造や造語能力がないのか、あるいは、子供に天体観察についての興味が最近薄いのか、それとも、夜空の星々をゆっくりながめ楽しむことができるほど、大気が澄んでいないのかもかもしれません。

例Q

1. 菊の花はお月さまみたいなあ
2. 花火は星をあつめたように
3. おじいちゃんの顔は太陽で夜は月だ
4. 星のようなお友達をもっともっとたくさん

Ⅲ. 子供の心的世界

以上、11の項目について逐次述べてきましたが、子供の比喩の中での特徴らしいものを総括してみますと、以下のようになります。

- (1) 心、表情のないものに生命を与え、あたかも動物や人間と似た行動をするかのようにとらえるアニミズムの表現が多い点です。これは修辭的な比喩というより、子供の言語運用の本質と考えるべきで、子供の柔軟な感性の現れと理解すべきです。
- (2) 子供の比喩はまた、不十分な説明や言葉の不足をおぎなう造語作用の一つと考え、この造語作用の能力は子供の鋭い感覚、すなわち聴覚、視覚、嗅覚、味覚、触覚に大きく依存していることがわかります。五つの感覚を通した認知能力によって、全く異質の物の中に、直感的に関係点を見つけ出しているのです。その感覚と観察は鋭いのですが、〈喩えられるもの〉と〈喩えることば〉に於ける概念関係は一般的・知性的というよりも個別的・感覚的です。そもそも比喩表現は、話し手又は書き手と聞き手又は読み手との間の互いに理解できるであろうという期待のもとに成立しますが、子供が〈喩えることば〉(vehicle)を選択する際には、相手の聞き手(読み手)側の理解力や経験をほとんど考慮していないようです。ましてや大人の経験、価値観、世界観とはだいぶ異なるので、大人にとってすぐに理解できないものがある訳です。例えば、

例R

1. くつわ虫のようにかぜとかぜがかさなって
2. ビー玉が世界中をたべちゃったんだ
3. 先生の顔はちゅうかそばみたく

4. 春は何千円もするクリームだ
(母親の手が冬の間荒れるが春の訪れと共に回復するのを見て)
5. 船からながめた陸はまるでライオンかゴリラが口を開けているよう
だ
6. (ライオンのよだれ) こんにゃく みたいな よだれ

このように言語環境を意図的に破る発想は、文脈上の意外性による効果を求めるといっても、言葉の不足を補ぎなうために比喩を使っているのであり、成人の意味の世界とは異なる子供の新しい意味の世界を生活経験の中から創り出している訳です。

一般的に〈喩えることば〉(vehicle)は、その表現主体である書き手の想像の世界を覗く窓であり、別に規則性もないのですが、作品のイメージの流れを導き、それらが全体に集合して作品のスタイルを創り出す働きをしているといえます。子供のこれらの自由詩にみられる比喩表現については、次のようにいえるでしょう。子供は描こうとする対象に接すると、まずそれらが身の廻りのどのような物に似ているのかを感覚的に直感し、すばやくその対象物を新しい比喩表現に移し替えていくのです。子供の比喩表現の場合には、〈喩えることば〉は必ずしも他の多くの人々が同じように経験したり、又は感じたりできるような一般的普遍的知識ではなくて、個別的限定なものが多いのもそのためです。だから〈喩えることば〉が形成するイメージも、子供の想像の世界だけに限る比較的限定されたイメージであると推定できます。

そこで『比喩表現の理論と分類』国立国語研究所 57(1978)に挙げられている川端康成の作品(成人向け)の底を流れるイメージ(すでに述べた〈主語・主意を喩える言葉〉が心理的残像として考えられたものや形象)を参照しながら、子供の自由詩を素材にして仮に14種類のイメージの項目をたててみます。因みに『理想の国語辞典』(国広1997:90)には、細かに著者が観察したイメージの意味・用法が書かれていますが、その書の中での(1)〈心の中に描かれる具体像〉という定義がここでいうイメージの意味に当たります。例えば次の例文で用いられているイメージの語彙を考えてみて下さい。

明るい空に黒く際立った煙突が、煙を盛んに吐き出している
イメージ、そのたなびく煙と形まで、眼に残っているような
気がしていた。 大岡昇平『少年』より（国広 1997:91）

動詞、副詞等についてイメージの形成の上で明瞭でないと思われるものは分類の対象から除いて、581例のイメージを抽出して分類したものが、次の表-2に示してあります。

表-2 喩詞のイメージ分析(581例中)

イメージの種類	1年	2年	3年	4年	5年	6年	合計
	%	%	%	%	%	%	%
生活のイメージ	4.13	4.99	4.3	2.24	4.82	3.96	24.42
幼のイメージ	4.47	4.64	4.64	2.92	2.75	2.92	22.36
動物のイメージ	1.55	2.24	1.20	1.38	1.55	2.06	9.98
抽象のイメージ	1.55	0.69	0.69	0.34	1.55	3.27	8.08
人のイメージ	1.03	1.03	1.20	1.89	1.03	1.20	7.40
自然のイメージ	0.86	0.52	1.55	1.72	0.86	1.20	6.70
光のイメージ	1.72	0.69	0.69	0.69	0.34	0.52	4.64
水のイメージ	0.69	1.03	0.52	0.69	0.52	1.03	4.47
怪奇のイメージ	0.17	0.69	0.52	1.38	0.69	0.17	3.61
乗り物のイメージ	0.86	0.34	0.69	0.86	0.52	0	3.27
雲のイメージ	0.34	0	0.17	0.34	0.17	0.69	1.72
機械のイメージ	0.17	0	0.17	0	0.34	0.69	1.38
戦のイメージ	0	0.34	0.52	0	0	0.17	1.03
神秘のイメージ	0	0.17	0.17	0.17	0.17	0.17	0.86
生活イメージ	: 衣・食・住・道具・場所・人間関係を示す語彙						
幼のイメージ	: 遊び・菓子・子ども・親・玩具・飾りもの・人形・面						
動物のイメージ	: 小動物・大動物・昆虫・鳥・魚						
抽象のイメージ	: 感覚・時間・夢・生命・状態(状況)						
人のイメージ	: 人の状態・身体・顔・姿・有名人物						
自然のイメージ	: 植物・風景・鋼物・自然現象						
光のイメージ	: 輝き・天体・火・光・稲妻						
怪奇のイメージ	: 魔物・幽霊・怪物・超人間・血						
戦のイメージ	: 武器・兵士						
神秘のイメージ	: 妖精・神・天使・別世界						

〈喩えることば〉には、〈生活〉や〈幼〉に関係する語彙が多く用いられ、自由詩の形をとっていても現実的な生活の場が主題になっていて、哲学的抽象的な世界を描いているのではありません。一方、川端康成の作品のイメージは〈神秘〉と〈怪奇〉とされていますが、(中村 明, 1978:70—81) 子供の場合それは少数です。むしろ〈生活〉のイメージが1位で、道具、食べ物、衣服類が多く、そして2位の〈幼〉のイメージでも、遊び、お菓

子、子ども、玩具に関するものが多いのです。〈おどる〉〈いたずらをする〉〈相撲をする〉〈あばれる〉〈遊ぶ〉〈冒険する〉〈ふざける〉といった動詞で表現するものが目立ちます。これら〈幼〉のイメージでは、その頻度数は、低学年は高学年の倍の値を示しているのが特徴です。以下〈動物〉のイメージでは、小動物、大動物、昆虫に関する語彙、そして〈抽象化〉のイメージでは感覚の語彙が多く、高学年は低学年の倍の値を示しています。〈人〉のイメージでは、人の身分や状態を示す語彙や体の名称等の語彙が使用されています。〈自然〉のイメージでは、植物、風景に関する語彙が多くみられます。〈光〉のイメージでは、輝きを表わす言葉特に宝石、ダイヤ、シャボン玉が多いようです。

要するに子供の自由詩について明白なことは、〈喩えることば〉は、一般的知識や常識に基づいて創り出されるというより、子供たちが互いに共有しているような言葉のストックから取り出されていることです。表面上の言葉使いは少し違っていても、彼等は共通した限られたイメージを持ち、それらを比喩という方法で表現しているといえます。自由詩にみられる子供の持つイメージの近似性は大きいのですが、〈喩えることば〉とく喩えられる物〉をどのように選択するかは個々の子供の自由選択に委ねられていますから、大人の想像を超える個性的限定的なもので、一般性に欠けている訳です。

子供たちにとって、比喩表現は子供の〈言葉〉そのものであり、豊かな〈意味〉の世界です。冒頭の定義のように、比喩は間接的表現技法といわれていますが、子供達にとっては、それは異化作用（1910年代半ばからロシアフォルマリストが展開した文学・文芸評論運動の説の一つで、日常的な表現形式に或る別の意味を持たせて一層異様に内容を引き立たせようとする働き。）を追求した純粹に詩的な言語というよりも、子供の言語運用自体に内在するものです。そうした言語運用は子供の鋭い感覚や直感によって支えられているのがこれまで挙げてきた資料でわかります。

しかし次の点も注意すべきでしょう。統計上の数値から観察すると〈喩えることば〉のイメージは、抽象的概念のイメージを除いて、数値の差は大きくはありません。強いて云えば小学校1年生には他の学年と区別されているような特徴があります。例えば、無生物に喩える例と感覚に訴える比喩が極めて多く、抽象化は少ないことです。子供は、生れて就学前6年間は遊びを通じて言語の一部を習得しますが、就学してはじめて学校教育

を通じて書き言葉の本格的学習が始まります。この時期には本質的な言語発達の段階は、ほぼ終了しているのですが、小学校1年生では、幼児ことばの特徴である未知の事物や事柄を指すのに既知のもの（特に無生物）の特徴、そして類似性や近似性に基づいて命名している傾向が強いといえます。

こうした子供の比喩表現が漸次成人言語の拡張表現に変わっていく過程は、中学生の自由詩と比較検討することによって、より興味深い言語活動一般の研究対象となるでしょう。

参考文献

- Burling, R. 1992. *Patterns of Language*. San Diego: Academic Press.
- Clark, Eve V., Susan A. Gelman, and Nancy Lane. 1985. Compound Nouns and Category Structure in Young Children. *Child Development* 56:84-91.
- Farb Peter. 1974. *Word Play*(first edition). New York: Alfred Knopf.
- Fergusson, F. 1961. *Aristotle's Poetics with an introductory essay by F. Fergusson* (S.H. Butcher, Trans.). New York: Hill and Wang.
- Gibbs, Raymond W. 1994. *The Poetics of Mind Figurative Thought, Language and Understanding*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Goldberg, Adele E. 1995. *A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago and London: The University of Chicago Press.
- Hawkes, T. 1977. *Metaphor*. London and New York: Methuen.
- Jackendoff, R.S. 1992. *Language of the Mind*. Cambridge, Mass: MIT Press.
- 国広哲弥. 1982. 『意味論の方法』. 東京: 大修館.
- 国広哲弥. 1979. 『理想の国語辞典』. 東京: 大修館.
- Lakoff, G. and M. Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago and London: The University of Chicago Press.
- 中村 明. 1978. 『比喩表現の理論と分類』 国立国語研究所57(再版). 東京: 秀英出版.

- 中村 明. 1979. 『比喩表現辞典』(5版). 東京:角川書店.
- Pinker, S. 1994. *The Language Instinct*. London:The Penguin Press.
- Richards, I. A. 1936. *The Philosophy of Rhetoric*. Oxford: Oxford University Press.
- Slobin, Dan. 1985. Crosslinguistic Evidence for the Language-Making Capacity. In D.Slobin, ed., *A Crosslinguistic Study of Language Acquisition*. Vol. 2:Theoretical Issues. Hillsdale, N. J. :Lawrence Erlbaum.
- Taylor, John R. 1989. *Linguistic Categorization Prototypes in Linguistic Theory*. Oxford:Clarendon Press.
- Trask, R. L. 1995. *Language:The Basics*. Oxford:Routledge.
- Ungerer, F. and H. J. Schmid. 1996. *An Introduction to Cognitive Linguistics*. London and New York:Longman.
- Waldron, R. A. 1967. *Sense and Sense Development*. London:Andre Deutch.

資 料

- 「小さな目」 1976年1月～1980年12月 湘南版『朝日新聞』掲載。
- 『1年生の詩』～『6年生の詩』(日本作文の会 編集)1974。東京:あすなろ書店。
- 『ぼくらの詩集 小さな目』1巻～3巻(朝日新聞社編)1970。東京:あかね書房。
- 亀村五郎(編) 1984, 『こどものひろば』 東京:福音館書店。

この小論の執筆にあたり10年間神奈川大学に於て御教鞭を執られた国広哲弥教授に対し貴重な御示唆と御助言に心より感謝の意を表わします。これは1998年7月ノッティンガム大学(UK)で開催されたInternational Speech, Writing and Context Conferenceに於いて発表したものを一部修正した小論であります。